

編 集 後 記

今回はすべて投稿原稿であるが、症例についても、また研究面についても、いずれも興味深々たるものがあり、ねていてまつ“ぼたもち”式の出来あがりものでないことは、一読されればよく分ることと思う。

たとえば、崎田氏らの症例報告にしても、今後問題となる食道の早期癌発見について大きな役割をなすであろうし、日本住血吸虫卵の報告(矢野)も目あたらしく、十二指腸ポリープの診断も現在はずでに内視鏡の分野に入ってきている。いずれの症例も、こくがあるものであり、読めば読むほど、勉強になるものである。

研究面においての感想は、内視鏡的研索がすみずみまで及んでいるということである。

それぞれ独自の立場において、それが駆使され、新しい部面を開いて行くという、これからがたのしみになるものである。

手術面から、或いは、放射線治療面からのいろいろな問題がもちだされ、いよいよこの誌の利用面が多くなるであろう。

編集した側から申せば、消化器に関するかぎり、この一冊を毎月みていけば、ことたりるところまでもっていききたいところである。

7月には、第2回国際内視鏡学会が(I)ローマ、(II)コペンハーゲンで、ついで、第4回世界消化器病学会がコペンハーゲンで開催される。更に、1971年には、日本医学会総会が開催される。皆様には多忙の年ではあるが、健康に留意して大きく発展されることを期待し、その成果がまたこの誌に記載されることを望んでいる次第である。

<内 海 胖>

<編集> 早 期 胃 癌 研 究 会